機器分析評価センターの一年を振り返って

機器分析評価センター
専任教員　谷村　誠

2020 年は歴史に残る１年となりました。ご存知の通り、２ 月中旬から拡がり始めました新型コロナウイルス感染（COVID-１９）の影響は本学の運営にも多大な支障を与えました。新しい年度を迎えるにあたって入学式は中止となり、大学は閉鎖され、講義（５月から開始）もオンラインとなり・・・ということで、学生の姿が学内から消えてしまう事態になってしまいました。機器分析評価センター（以下、センターと記します）は教育研究支援を基本目的としていますので、学生がいないと開店休業状態に陥ります。そこで繁忙期には実施できないような機器のメンテナンスを実施しつつ、いつ復活するか分からない学生利用を待ち続ける日々が続きました。７月に入ってから COVID-１９ に対する規制も少しずつ緩和されるようになり、夏休みが明けた ９ 月終わり頃から学生（メインは卒修論等の研究が必要な学生ですが）は戻りつつあり、12 月時点ではセンターも日常の姿を取り戻してきた感があります。現在、センターは通常通り開館していますが、利用時には手指のアルコール消毒～手袋装着～体温測定を義務付けています。不特定多数の学生が同じ機器を利用するセンターでは、この処置は利用者の安全のために必要不可欠であることはお分かり頂けるかと思います。幸い、センターに関連した感染者は 2020 年では発生しておらず、この点はホッとしています。

COVID-１９ の影響は社会で様々な変革を要請しています。各大学においても、例えばリモート講義の是非（悪いことばかりではない）を問うことで講義の在り方を見つめ直すような取り組みは行われているかと思います。リモート講義の長所も取り入れた新しい講義スタイルが構築できれば、今回の経験をプラスに活かすことはできるでしょう。センターにおいても、機器利用の在り方を再考する切っ掛けになりました。例えば「自動化/遠隔化」をキーワードにした新しい利用方法は既に多くの機関で検討されているかと思いますが、改めて試算するとその効果（主として効率化に伴う時間創出）の大きさには驚くことが多いのです。センターは本学での科学的価値を創造するための支援施設、と捉えると、教員や学生に対する時間創出は大きな価値を生み出すための礎になることができるのでは、とも感じています。

COVID-１９ 対応が必要不可欠な状況はしばらく続くものと予想されます。しかし、その対応だけに振り回されるのではなく、この機会により良い機器利用システムを構築できれば、新たなセンターへ発展することも可能ではないか、とぼんやりとではありますが考えております。

2021 年も皆様の御指導や御支援を賜りたく、お願いを申し上げます。